

# 池上先生と私

鷲尾和行

物心着いた頃からの動物好きであった私は、1975年（昭和50年）4月、新潟南高校（以下南高とする）に入学と同時に、迷わず生物部に入部した。池上先生とはその時からのおつきあいをさせて頂いた。

高校入学当時の池上先生の第1印象は「高校の先生らしくない先生」だった。なぜなら、初対面の服装が作業着だったのだから。級友も用務員さんだと思っていたらしい。

そんな先生との出会いが、私の人生を大きく変えたと言っても過言ではない。池上先生はそれほど私にとって大きな存在だった。ここに、先生との思い出の一部を書かせて頂き、先生への追悼の意を表したい。

## 南高生物部

生物部では動物班に所属した。当時、私は昆虫少年だった。

当時の生物部の1年生の仕事は、サンショウウオの幼生の世話となぜか新聞紙切りと新聞紙干し（翌朝の回収も）だった。

ある日の生物準備室。私がサンショウウオの幼生の世話をしていると、池上先生が話しかけて下さった。「君はサンショウウオが専門かね?」「いいえ、本当は昆虫です。…」いろいろ話しをしているうちに、私は少しか本音を話した。「でも、僕は実験室で作業するより野外で活動する方が好きなんです。」こう言うと先生に怒られるのではないかと思っぴくびくしたが、私の意に反して先生は「それが筋だ。君のような考えが一番大切だ。」とおっしゃって下さった。この時、池上先生との距離が短くなったように感じた。

先生の授業は哲学的な話しあり、南高のOBの話しあり、生物の授業という感じがしなかった。イラストを交えて楽しく展開するのも先生の授業の特徴であった。しかし、なぜか、私のクラスではカエルのイラストはほとんど書かなかった。（先生のお気遣い感謝しております。）

また、先生はご自分のことをよく『クマ』とおっしゃっていた。以前の南高の生徒が付けたあだ名だそうであるが、先生ご自身はかなり気に入っているご様子であった。事ある毎に「クマ（ご自分のこと）は大丈夫だ。」「クマはこんなことくらい平気だよ。」とおっしゃっていた。授業でもよくご自分のことを『クマ』と言っていた。

## はじめての植物採集

1976年7月。生物部の夏の観察旅行で奥三面へ行った。その時の私の目的はもちろん蝶の採集だが、蝶の食草を池上先生から教えてもらおうと、捕虫網とともに胴乱も持って行った。先生には蝶の食草になるイケマやハルニレなどを教えてほしい旨を伝えておいた。先生は優しく教えて下さった。

そのうち、「ワシオや、これは食草ではないが勉強になるから採集しておきなさい。」と枝をひとつ差し出された。「これはクロベと言って……（その後の説明は忘れてしまったが『貴重』であると言っていたような気がする）」しばらく行くとまた、「これはクガイソウウと言って食草にはならないだろうが、参考になるから採っておきなさい。」

なにやら食草以外の標本も胴乱の中に入ってしまった。

## 標本づくり

さて、植物採集はしたものの標本の作り方がわからない。生物部の先輩である佐藤和彦さんに教えてもらって、必死に作った。

そして同定。乾燥標本を作ったとしても、野帳を見ても、当時の私にはどれがどの植物なのかまったくわからなかったし、どの仲間も見当がつかなかった。

そこで恐る恐る池上先生に植物の名前を聞きに行くと、先生はにこにこ笑って「この中にあるから自分で調べなさい。」と4冊の図鑑を指示された。私は必死で調べた。放課後の時間すべてを使って調べた植物の名前は「カメバヒキオコシ」。私が初めて自分で調べた標本であった。

先生はにこにこ笑って「よく調べたな。これは、その…で（そのことばはよく覚えていないのだが）『タイリンヤマハッカ』と言うんだ。よく調べた。」

このように、何日もかけて標本を同定した。先生はいつもにこにこして、優しく教えて下さった。そして、必ず最後にほめて下さった。今になって考えると、先生のほめて下さるその言葉を励みに当時植物標本を作っていたような気がする。

そんなこんなの3年間の生物部での活動で、いやがおうにも植物に関わらざるを得なかったわけだが、食草標本が一段落ついたら、私は昆虫の世界に戻るつもりでいた。それが…

## ツクシウロコゴケの「はな」

高校を卒業しても、よく南高に遊びに行った。母校で池上先生や羽鳥先生・中村先生と会えるのが楽しみであった。

1982年(昭和57年)4月29日。池上先生から「笹神村(現阿賀野市)にコケの“はな”が咲いているから、もし、君に時間があるなら一緒に行こう。」と誘って頂いた。場所は笹神村炊出。

先生曰く「この前、石沢さんと一緒に行ったときには咲く直前だったから、今日あたりちょうど咲いている頃だろう。咲いていたら、図を書きたい。コケ自身はどこでもあるのだが、苔類の“はな”は時期が限られているので貴重なのさ。」先生のおっしゃった“はな”は“さく”というものらしい。コケは“ツクシウロコゴケ”だったと記憶している。

現地へ着くと、車を降りてから一つ一つ丁寧に植物の解説をして下さった。私にとっては大変勉強になった。ただかだか500m位の距離だったが、半日かけて歩いた。

昼食をとり、この辺だということろで2人でコケの“はな”を探した。岩場をくまなく探した。黒っぽい未熟なさくはたくさんあったが、咲いている“はな”(成熟して4つに割れたもの)はなかなか見つけられなかった。あきらめて帰ろうとした頃、偶然私の足元に見慣れない茶色い小さなものがあつた。「これですか?」と聞いた。その時の先生のうれしそうな様子は、今も忘れられない。と同時に、この時先生にほめられたことが私をますます植物に興味をもたせた。

その帰り道。車の中で池上先生が「君は本気で植物をやる気があるのか?僕からは君に『やれ』とは言わない。君がやる気があるのであれば(植物を)教えるよ。」とおっしゃって下さった。

私は「はい。やる気はあります。」と答えた。私が植物に本格的に関わることになったのはこの時からだ。それからしばらくしてじねんじょ会に入会した。

## 佐 潟

1982年(昭和57年)9月23日、じねんじょ会観察会、佐潟。尾崎先生が幹事をされていた。

朝、皆さんに挨拶。それから佐潟一周を池上先生と回った。植物ひとつひとつをよく観察されて、私にも教えて下さった。が、お昼になっても先生からは『昼食』の言葉がない。腹は減ったが、そのまま先生について回った。

夕方皆さんとやっと合流。先生の「いやー、おもしろかった。参考になった。」の言葉。解散になったのは午後4:00過ぎ。『この時間なら、もうすぐ夕食だから、昼食を食べなくてもいいや。』と思っていたら、池上先生は「君のお母さんや僕の家内が心配するから飯を食って帰ろう。」と言う。結局、夕暮れの佐潟で2人でかなり遅い昼食をとった。ちなみにその時の我が家の夕食は、その2時間後であった。

じねんじょ会というのは皆が昼食抜きで採集するのだ、と当時は思ったが、そうではないとわかったのはその後しばらくしてからだった。

## 標 本 整 理

1983年(昭和58年)秋、池上先生の標本が新潟市に寄贈されることになった。標本を整理・運搬するのに、当時時間に余裕のあった私が、先生のお手伝いをするようになった。

当初は新潟南高校での作業。池上先生の手伝いをするという名目で、勉強をさせてもらえるので、私にとってはいい話だった。作業としては、新聞紙切りと新聞紙換えと標本の荷造りだけであるが、なにしろ量が半端じゃないので、時間がいくらあっても足りなかったが、充実した楽しい時間であった。

そこでの先生との雑談はすべてが勉強であった。標本の作り方・整理の仕方・資料室のあり方・研究の仕方・南高生物部のOBの話し・・・どれもこれも興味深く、楽しく、勉強になった。

一方で、この期間で、先生ご自身についてもわかったこともあった。

先生は水分をたくさんお飲みになること、けっこう寒がりなこと、弁当には煮豆が必ず入っていることなど。

## 九 才 坂 峠

1983年(昭和58年)11月。県の調査で上川村の九才坂峠に行くから一緒に来ないか、と言われて参加させて頂いた。コウヤマキの調査だった。同行者は尾崎先生、石沢先生、平さんなど。

途中の山道はゆっくり採集していき、峠に着いて、また、調査・観察。石沢先生は「コウヤマキを採集するなら福島県側で。」と再三言っていた。

調査が終わり、では下ろうということで、皆さんは急いで下山。池上先生はいつものように丁寧に観察をして下山。私は先生のお供で下山したが、あたりはだんだん暗くなっていく。「僕は懐中電灯を持っているから大丈夫だよ。」と池上先生。

それまでの私の業界(蝶)では、山に懐中電灯は必要ない世界だったのでそれを言うと、「植物は、懐中電灯とふろしきは必需品だ。」と教えて頂いた。

辺りがすっかり暗くなったころ、先生はリュックから懐中電灯を取り出し、電池をセットしようとした。すると、手から電池が落ちてしまった。あわてて、探す2人。しかし、辺りは闇夜。手探りで探したが見つからない。池上先生「ワシオ、いいや。しかたがないからこのまま下ろう。」と。

幸いその夜は満月。月明かりで山を下った。途中2人も何回もつまずき、ころんだ。登山口についたのは夜8:00頃だった。尾崎先生、石沢先生、平さんが登山口に隣接しているダイコン畑の脇で私たちを出迎えて下さった。

じねんじょ会というのは皆がこういう懐中電灯採集をするのだ、と当時は思ったが、そうではないとわかったのはその後しばらくしてからだった。

### 植物資料室

1984年(昭和59年)1月。植物資料室ができて、嘱託職員として3ヶ月間、池上先生と毎日植物資料室へ通った。この期間も先生からいろいろ勉強させて頂いた。事実、たまに訪ねてくるお客様にうらやましがられた。

そして、3月。私に、某私立高校の常勤講師の話がきた。当時の私は、資料室で先生からもっと勉強したかったのですが、この話を断ろうと思ったが、先生は「(植物資料室の嘱託職員が)臨時では先の見通しがない。就職すべきである。」と言って、私を後押しして下さいました。今日私が教員としていられるのも先生のお陰である。

### じねんじょ観察会での思い出

教員になってからは、池上先生とはじねんじょの観察会でお会いすることが多くなった。

新発田市箱岩・鹿瀬町赤崎山・山北など様々なところで先生とご一緒させていただいた。先生のご自宅と私の実家が近くであったことから送り・迎えを私がやるケースが多かった。

先生はどんなところに行かれても、最後は「いやぁ、楽しかった。参考になった。勉強になった。」とおっしゃって下さった。この言葉は幹事をしている身には最高の言葉であった。

先生は「何事も経験だ。」「何事も勉強だ。」が口癖であった。実際、先生ご自身も何にでも興味を持たれた。

車走行中にタヌキの死体があったと言うと身を乗り出してご覧になった。

銀山平の「籠渡し」では先生自ら説明をして、楽しみながら川を渡った。

山の斜面や崖下に何かわからない植物があるとじっと観察されていた。私が「採りに行きましょうか?」と申し出ると、「いや、危ないからいい。」と一度は必ずそうおっしゃる。しかし、それでも行くと「危ない、危ない…」と言いながら見守って下さり、現地に着くと「せっかくだから僕にも一枝。」と言うのがいつものパターンであった。(われわれ南高生物部OB達の間では、先生が「危ない、危ない」と言うと、ますますやる気になると評判であった。) また、夜の「べんきょう会」には、先生の講義があった。

内容は、植物のことはもちろん、民俗のこと、音楽のこと、歴史、学者や先輩達の逸話・裏話、そして、先生の歌。「流浪の旅」は、糸魚川姫川谷で初めて聞いた。

観察会後の帰りの車の中は、一番勉強になる時間であった。話が盛り上がると、先生のご自宅の前で、車の中で1時間以上も話し続けることも珍しくなかった。

そして、先生が必ず最後に締めくくる言葉があった。

「いいかわ시오、奥さんが支えてくれなければ、男なんて何にもできない。牧野富太郎もそう言っていた。『家守りし妻の恵みやわが学び 世の中のあらん限りやスエコ笹』俺もそうだ。家内がいなければ俺なんか何もできない。君も奥さんに感謝しなさい。」

先生との思い出はつきない。こう書き始めると“あんなこともあった”“こんなこともあった”と思出す。先生は、植物を中心とした学問、教育、人間、自然、そして何よりも奥様を大切に考えておられたように思う。

いつも奥様に感謝していた先生は、2002年(平成14年)7月永眠された。

生前「君(私)が作った植物誌を俺の墓の前に供えてくれ。そうしたらうれしくて墓石を動かしてやる。」とおっしゃって下さったが、それも未だに果たせないまま、年月が過ぎ去ってしまった。お許し下さい。



Sept. 5. 1985 赤崎山頂上 鹿瀬町役場の人達



May. 19. 1986 加茂市下条ダム



# 凍凍高報



## 池上義信

昭和六十一年

三月十日

〔池上先生の手形秘話〕：佐藤和彦さん（新潟南高校卒業生）が、何かの用事で植物資料室に出かけた。そこで池上先生と談笑しているときに、卒業アルバムの話題になったそうだ。

佐藤さんご本人の卒業アルバムの裏表紙には、卒業式当日に池上先生からカエルのイラストを描いてもらっていた。しかし、当時大相撲の貴乃花(?)の手形の色紙が話題になっていたこともあり、佐藤さんがイラストだけではなく、池上先生の手形も記念に欲しいと頼み込んだ。

池上先生は最初は断ったらしいが、絶対いやだという雰囲気にはならなかったそうだ。何度もお願いするうちに手形を色紙に取ることになったらしい。先生もまんざらでもなかったという（佐藤さん談）。